一昨年の『THE POWER SOURCE』に続く、JUDY AND MARY2度目のロンドン・レコーディング。

<1月3日 これから寒いロンドンだ>

YUKIの1998年の日記は、そう始まっていた。

1月9日 ずっと最低だ。なんでこうなんだろう？

歌詞もダメなら歌もダメ、良いことなしである。本当に良くない。

こんなことってあるんだ。とにかく歌詞がまったくといっていいほ

ど出来ない。こんなときはどうしよう？ 今日マネジたちが来る。

なんかダメだ。誰か助けてください。胃がとても痛い。

1月10日 ケンタッキーを買ってひとりで歩く。

テムズ川のほとりをずっと歩いて歩いて、ひとりでパブに入る。

レコーディングを終えて、2月に日本に帰る日が楽しみだ。

そのときまでにステキな歌詞を頑張って書かなきゃ。頑張れ自分！

いつもちゃんとできてたじゃん。やればできるよ。

1月12日 今日は「手紙をかくよ」が出来た。すごい好きだ。

良かった。長い長いロンドン。村上春樹の『世界の終わりとハードボイルド・ワ ンダーランド』を読む。女の人の感じがいいなあ。

すごく面白かった。まぁ、スランプ脱出。おめでとう自分！

1月17日 それにしてもここはなんてつまんない国なんだ。

ミカと長電話をした。何もできない。生まれないものは生まれない。

待ってなくちゃダメだ。TOKYO FMの収録でロンドン・ズーへ。

1月18日 「手紙をかくよ」の歌入れ。この無気力はなんだろう。

つらい。どうしていいかわからない。笑える日が想像もつかない。

日本から離れてちょうど1ヵ月、すごく長く感じる。

1月19日 この暗闇から出られない。絶望的だ。

何もしたくないし何も生まれない。どこもいきたくないしどこにも

行かない。スタジオの部屋で死んでいる。かなりヤバイ。

どうしたらいいんだろ、どうなっちゃうのかなあ。

この曇り空の心がパーッと晴れる日が来るのかなぁ。

1月20日 試してみたい、29日の日に帰れるのなら帰ろう。

歌いたくない歌いたくない歌いたくない。

あんなに歌いたかったのに、全然歌いたくない。

1月21日 何をしたいの？ 何もしたくないのかな。

「ライブ観に行く？」「クラブ行こうよ」、みんな誘ってくれる。

行きたくない。私の欲望って何だろう。何もない。

日本のデパートに行きたい。ネイル・サロンに行きたい。

爪がボロボロでムカツク。

1月22日 昨日ユズに話をした。29日に一度日本へ帰ることが決定。

あと1週間。そうでもしないとまったく出来ないのである。

何も手に付かない。私の顔、酷い。体もボロボロだ。

帰ろう。そして帰ってから復活するんだ。

1月23日 ヤバイっすね。なんか悪いほうに行ってますねぇ

こういうのはいっぺんにやってくるものなんだなあ。

ずーっとこんなわけはないと思うけど、大きな選択のときなのかも

なぁとも思う。取り巻く全てが大きすぎて、こんなのは説明でき

ないし相談しようにもうまく言えない。これはなんだ？

……私はどうしたらいいのかな……

1月29日から3日間、YUKIは東京へ戻る。

成田へ到着して、すぐに友達に電話。

家に荷物だけを置くと、すぐに食事に出かける。

帰国したその日も、翌日もその次の日も、眠ることさえ忘れて、友達に会う。話して話して、泣く。でも、だから笑える。

このときはYUKIだけでなく、恩田快人も一時、帰国していた。

バンドとは不思議なもので、不調な人間がいればそうでない者もいる。このレコーディングの間YUKIと対極だったのは、五十嵐公太。YUKIがあんなに快調だった『THE POWER SOURCE』では逆に五十嵐はイメージしている音を叩けなかったと、すぐにジムへ通い始め体を作り、1年かけて今回のレコーディングの準備をしていた。

なかなか自分を取り戻せないYUKIのことを五十嵐も心配していた。

「YUKI、上がったテープを聴いて、昨日ホテルで泣いたよ。いい詞だ。バッチリ。歌もいい。これで魂が入った」

それがこのレコーディングで最初に出来た「手紙をかくよ」だった。今回のロンドン・レコーディングでは、なぜだかみんな、センチメンタルな気分になっていた。「手紙をかくよ」を聴いて泣けてきたのは、五十嵐だけではなかったようだ。

「YUKIが歌うと、魂が入る」

この歌入れを終えたあと、TAKUYAもそう言ってくれた。これまで幾度となく耳にしていたその言葉が、このときほどうれしく感じられたことはなかった。

そしてメンバー、スタッフもまた、「手紙をかくよ」の完成に、ほっと胸を撫で下ろしていた。大丈夫、YUKIは最後までいける、と。

しかし、それは、束の間の安堵にすぎなかった。

2月8日 2回目のロンドン。プラダで坂井真紀ちゃんと出会う。

イタリアンを食べて、日曜日に飲茶をしにいく約束。

不思議なこともあるのだ。ロンドンだからできたことなのでしょう。

かわいい人だよなぁ、真紀ちゃん。

なんか寂しい。私、友達っていなかったっけ。

この思いはどこにいけばいいのかなあ。

なんでこんなに寂しいんだろ。喪失感、誰ともつながってない感じ。

ひとりぼっち。泣きたいけど涙も出ないし寝れないし楽しくない。

何もできない。誰か笑わせてくれ。私を。

2月9日 この孤独感はどこからくるんだろう。

歌もうたいたくないし、言葉を口に出すとどんどん離れていく。

文字でももどかしいし、どう伝えたらいいかわからない。迷ってる。

もうダメなんだ。苦しいときは苦しいことを歌えばいいのか？

無理をしないでいいのか……?

私は決定的な道筋を誤ったような気がする。

二度と戻れない日々を懐かしんでばっかりで何もできない。

自動的に動くこの腕も自分のものじゃないみたい。

2月17日 26才。

楽しい一年を、新しい私との共同生活を心に決め、過ごすのだ。

いろんなことをせき止めることはできないとYUKIは思っていた。

思うように歌えなくて、苛立つ。

詞が出来なくて焦り、やり場のない思いだけが溜まっていく。

『THE POWER SOURCE』の歌詞を読み返すたびに、こういう詞はもう二度と自分には書けないと、やりきれない思いになる。気力が消えていく。何もかもを、悲観するようになる。絡み合った失望と焦燥感とは、やがてやりきれない孤独を心のなかにうえつけていった。

これは無謀な道を選んでしまったと、ロンドンに入ってすぐに、YUKIもメンバーもスタッフも気づいていた。

昨年の11月に手術をして1ヵ月しか経っていないこと、十分なボイス・トレーニングを積まずに日本を離れたこと。それに、バンドはレコーディングのやり方そのものも変えていた。

いつもなら全員でスタジオに入り、入念なプリプロダクションを行ってレコーディングへ移行するところだが、今回は出来た曲をすぐスタジオで仕上げていく。

新しい曲はすべて、TAKUYAがロンドンへ入ってから書いている。

上がった曲をスタジオでセッションしながら作り上げていく、そういったライブなやり方のほうが、YUKIの喉もこなれるのではないかという読みも含まれていた。が、残念ながら、それは誤算に終わった。

YUKIはそのやり方に馴染めなかった。

あろうことか、上がった曲をなかなか好きになれない自分がいた。

これまでのように、思うように歌えないから曲が内に入ってこない、曲が入ってこないから、言葉も出てこない。言葉が出てこないから、曲を好きになれない。歌をうたおうという気力が萎えていく。

もはや何が原因なのか、彼女にはわからなくなっていた。

再びロンドンへ戻ってきたというのに、一度喪失した自信はなかなか取り戻すことができない。

（やっぱり延ばすしかない。時間が流れるのを待とう。もうちょっと待てば、たぶんまた、いつものあたしのあの感じになれるのかもしれない）

しかし、待ってはくれないものが現実にはある。

「YUKIちゃん、頑張ってこれだけ録りましょう」

ディレクターの土蔵とマネージャーの柚上は、ロンドンに戻ってきたYUKIを、時間をかけてとくとくと説得した。シングルを録らなくては、レコーディングの期日はもうとっくに過ぎている。ビデオ撮りもロンドンで行う。手はずはすべて整っていた。ここでやらなくてはリリースに間に合わないというところまで事態は切迫していた。

「わかった。でも、ごめん。あたし、あとは全部日本に帰ってやりたい。シングルだけ、ここでちゃんと頑張るから」

曲はTAKUYAから聴かされていた。

ドュビドュビバッパ ドュビドュビバッパッパ——こんな曲だったら、YUKI、歌いたいんじゃない？ そう言ってTAKUYAがギターを弾いてメロディを歌って聴かせてくれたとき、YUKIは確かに衝動を覚えた。

音楽をやりたいという欲求が静かに湧き上がってくる。

ウェイティング・ルームのソファに身を沈めて、何度も何度も、頭のなかでメロディをなぞった。

「とっても頑丈で、戦闘するときに使うもので、プロテクトするものってなんて言うんだっけ？」

そばで機材のチェックをしていたテクニカル・スタッフのタロウとテルが、ああ、それなら、とYUKIに教えてくれる。

「フルメタル・ジャケットじゃないすか？」

「あ、そっか。そうだね。メタルジャケットだ！」

あたしのモンスター 飛びだしておいで

キャンディスピーカー 体につめこんで

メタルジャケットよりも 強い声で

歌いながら とびのれ

自分で自分に喝を入れるとは、こういうことをいうのだろう。

<メタルジャケットよりも 強い声で>という言葉に、YUKIは自分の願いを込めた。

歌うことは、絶対に自分のライフ・ワークなんだという思いだけが、YUKIに「ミュージック ファイター」の歌詞を書かせていた。